



TITLE:

<雑録>王應麟の政術觀

AUTHOR(S):

宇都宮

CITATION:

宇都宮. <雑録>王應麟の政術觀. 東洋史研究 1939, 5(1): 82-82

ISSUE DATE:

1939-10-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/145655>

RIGHT:

して金櫨石室の意味を如實に理解し、まじだ。

配殿も亦塼築です。屋根は硬山（切妻の一種）で正面五間、入口を三所に開いて居ます。枋上に當つて通氣孔の様な小窓が一行に並んで居り、内部の構造が見たいのでしたが、案内者が鍵を持参しなかつたので駄目でした。

皇史宬に就いては「春明夢餘錄」卷十三に、

皇史宬在重華殿西。建於嘉靖十三年。門額以史爲文。以成爲宬。左右小

王應麟の政術觀

「王者といへば周の文王より高邁な王者はない。覇者といへば齊の桓公より高邁な覇者はない。この人達は皆賢い臣下を能く用ひた結果はじめてその名聲を後世にのこすことが出来たのである。」これは漢の高祖の詔の一節である。漢の宣帝は「漢の朝廷には漢の朝廷としての定まつた主義がある。漢の朝廷の政治のやり

門曰諡廡。以龍爲諡。皆上自製字。

而手書也。中貯三列朝實錄及寶訓。宬

中四周上下俱用石鑿。中具二十室。

永陵（嘉靖帝）定陵（萬曆帝）各占二室。

と見えて居ます。これに依ると嘉靖十三

年の建築です。猶御碑亭の滿漢二體嘉慶

十二年重修皇史宬記には年代が經つて漸

くいたんで來たので修理した由を記して

居ます。偕て其の修理と云ふのはどの程

度だつたでせうか。私は今後の精密な調

査に依つて、このものから明中葉の建築

の一標準が得られるのではあるまいかと

方は本來王道と霸道とを雜じて行

ふものである」といつてゐるが、思

ふに漢の政治のやり方が、このやう

に、王道と霸道とを混用することは

すでに、高祖の前掲の詔に現はれて

ゐるのである。劉向が賈誼をほめた

ことばに「古代の伊尹管仲といへど

も、この賈誼より遙かに秀れてゐた

とはいへまい。」とあるが、伊尹と管

仲とがどうして肩を並べて同じ範疇

に入れられ得ようか。林少穎は漢代

期待して居る次第です。

皇史宬には足の踏み所もない様に灌木

雜草が茂つて居ました。意地の悪い荊棘

類は服の上からでもさし込んで私共を悩

ました。那波先生は鹽でもまいて置

けばかうまでならないであらうと申され

ましたが、少しの注意さへ加へるならば

此の様な建築は殆んど永久に近い存在を

續け得るのに、甚だ遺憾に思はざるを得

ません。これは壽皇殿や文淵閣の場合も

同様でした。

（一四、九、二二記 小野生）

のかゝる傾向に對して「王道と霸道

との辨別をしない考へ方は漢代が一

番甚しい、人物の型に範疇を與へる

場合に、首肯し難い分類をやるのは

漢の儒學者が一番甚しいと思ふ。ど

こまでも王道を尊んで霸道をしりぞ

け、道義を唱道して功利的なものを

いはない漢の學者といへば、たゞ一

人董仲舒があるばかりだ。と論評し

てゐる。（困學紀聞卷十二攷史より

譯出）

（宇都宮）